て埋め、之を圍むに菊花文の狹き一緣を以てし、なほ角繋ぎの一帶を經て緣に卍繋ぎを用ひ、諸重の界線等には四菱繋ぎ、角繋ぎ、鉆杵繋ぎ等を置いてゐる。而して所傳に北斗圓曼荼羅は延曆寺座主慶圓（西紀九三一—一〇一九）の始めて圖する所、方曼荼羅は御室成就院僧正寛助（西紀一〇五七—一一二五）の始めて描ける所と云ふのであるが、今この圖を見るに、特に金彩多きは固より天上の尊形を圖するが爲なるべきも、この華麗を極むる用彩と、暈染及び雲網多き配色とには寧ろ古樣の著しきものがあり、圖相の如何は問はず、尠くも之等諸尊の描法には、その形相の傳來と共に、遠く大陸の遺風を傳へてゐるかに見える。

なほ圓曼荼羅の遺例にはボストン美術館所藏の一幅がある。圖樣本圖と大同にして諸尊の順位をも等しくするが、時代はやゝ下る。また方曼荼羅の一にして少しく異とすべきものに伊勢宇治山田法住院所藏の例（圖版第十六）がある。即ち通常の三重方曼荼羅の七星以下に尊名を記し、なほ七星に之を本命星とする干支、七曜に方位及び之を當年星とする年齡等、また十二宮に月名を添へたるほか、第四重に、官人、僧侶、武士、童子等の諸形三十六を置けるものである。描法簡素にして截金文の如きも唯その內院に襷入四花格子を敷く外は諸重の界線等に之を見るのみであるが、却つて其の間に雅趣を存し、製作鎌末を下らざるかに思ふも、唯斷爛著しきを惜しむ。而して北斗曼荼羅にしてその外重に三十六禽種子を配せるもあり、また一俗形を加ふるもありし如くであるが、未だかゝる圖相を說けるものを知らず、擧げて後考に俟ち度い。（渡邊）

三六　雲中供養佛　京都平等院藏

木造彩色（田中喜作「鳳凰堂雲中供養佛の研究」參照）

七　石圃筆山水圖　東京村山駒之助氏藏

紙本淡彩　掛幅裝　竪五四・五糎（一尺七寸九分九厘）　横四二・九糎（一尺四寸一分六厘）

八　石圃筆山水圖　東京宮野富次郎氏藏

紙本淡彩　掛幅裝　竪二八・四糎（九寸三分七厘）　横六五・五糎（二尺一寸六分二厘）

（以上梅津次郎「石圃叢考」參照）

內外彙報

寶聚院落慶特別展覽會　醍醐天皇一千年御忌奉贊會の記念事業の一つとして豫ねて建設中であつた京都醍醐寺靈寶館「寶聚院」は此程竣成し、去る四月十七日落慶供養が營まれた。同館は醍醐寺所藏の幾多祕寶を完全に保存し、傍ら研究に資すると共に又隨時展觀を催して一般の觀賞にも供する由である。建物は日本古住宅風の耐火建築で、陳列室、寶庫、整理室、研究室等に分かれ、よくそれらの完全を期して居る。醍醐寺の如き我が文化史上の貴重なる一大寶庫に對してかゝる施設のあるべき事はあまねく世の待望せし所、今これが成るを見て、歷史、美術方面の研究にたづさはる者としての感謝は勿論、又一方文化保存の社會的責務を果し得るものとして誠に欣びに堪へぬ次第である。

尙、落慶供養を機に同寺祕寶の特別展觀が四月末日まで行はれた。その內容は國寶、寺寶の宸翰、佛像、佛畫、文書、記錄、器物等約六十三點、一山の什寶の莫大な數に比しては少ないが、そのいづれも祕寶中の逸品にて、流石に一千有餘年の歷史ある同寺であると首肯せしめる。それ等のうち繪畫彫刻の作品に就いて其の目を左に擧げる。（中川）

過去現在因果經　卷第三　一卷　普賢延命菩薩畫像　一幅
大日金輪王畫像　一幅　焰魔天畫像　一幅

訶梨帝母畫像　一幅　六字經曼荼羅圖　一幅
尊勝曼荼羅圖　一幅　阿彌陀三尊畫像　一幅
地藏菩薩畫像　一幅　渡海文殊畫像　一幅
醍醐天皇宸影　一幅　五大尊畫像　五幅
豐臣秀吉畫像　一幅　義演准后畫像　一幅
舞樂圖　二曲屏　法橋宗達筆　一雙　調馬圖　六曲屏　一雙
幔幕圖　六曲屏　生駒等壽筆　半雙　地藏菩薩立像　一軀
吉祥天立像　一軀　阿彌陀如來坐像　一軀
焰魔天半跏像　一軀　如意輪觀音半跏像　一軀
大日如來坐像　一軀　聖觀音立像　一軀

第二回國寶重要美術品展覽會　皇太子殿下御降誕を奉祝して報知新聞社は昨春國寶重要美術品繪畫展覽會を開いたが、今春亦四月二十七日より五月二十三日迄を會期として、その第二回展覽會を催した。國寶重要美術品中の繪畫（日本及支那）を各種各時代に亙つて蒐め、昨春の缺を補ひ、新指定の作品を加へて出品點數三百を超えた。一々の作品夫々に貴重すべきものたることは今更云ふ迄もないが、概觀して今次の展覽に於て一流品の出品尠かりし憾みを禁じ得なかつたのは吾人のみではないであらう。目星しいものには、佛畫に野山の佛涅槃圖を筆頭として東寺の十二天及び兩界曼荼羅、龍光院の船中湧現觀音、高山寺の佛眼佛母等の名品を數へ、更に上杉神社の毘沙門天を稀らしと觀、肖像畫に普門院の勤操像、一乘寺の高僧像、妙法院の後白河天皇御像、長福寺の花園天皇御像を擧げ得るがその繪卷足利期水墨等には優品殆ど無く近世に於ては先づ桝谷家の大雅蕪村筆十便十宜圖、根津家の光琳筆燕子花圖屏風等を擧ぐるに留り、金剛寺の應擧筆襖繪全部の展觀を稀らしと見る位であらう。支那畫に至つても同樣で清涼寺の十六羅漢、金地院・久遠寺の傳徽宗筆山水圖、天龍寺の雲門大師清涼法眼禪師像、南禪寺の藥山李翺問答圖等を擧げる。

乍然あれだけ多數の作品を一堂に蒐めて展觀に供すること既に大事業たること云ふ迄もなく、特に新聞社の主催として、宣傳によつて多數の大衆を吸引して特にその教養に資した點從來の同種展覽會と同じく大なるものがあつたのを疑はない。（梅津）

肉筆浮世繪展覽會　關西に於ける浮世繪蒐藏家として知られた松木、武岡、尼崎、池戸の諸氏を初めて關西に於ける蒐集を基礎とし、之に帝室博物館等の關東の蒐集を多少加へてゐる。時代は敢て初期と限らず、窪俊滿、月岡雪鼎、山東京傳等にまで及んではゐるが、初期浮世繪の精品として知られてゐるものが殆んど一點も陳列せられなかつたことはこの種の展觀としての第一意義を失つたものであり、又作家に卽して考へても例へば肉筆を殘すこと多かりし師宣の如きが一點も集められなかつたことは甚だ遺憾であつた。然し少數ながら關東方面の蒐集を關西に紹介する點に於ては意義なしとしない。帝室博物館の長春筆婦女聞香圖、東京美術學校の春章筆竹林七妍圖又は福原、梅原、吉川諸家の舞妓圖等は恐らく關西の鑑賞家を喜ばしむるに足るものであつたであらう。一面吾人の觀點よりする時は池戸、尼崎諸氏儲藏のものゝ中關東に於て未だ矚目の機を得なかつたかと思はれるものもあつて興味を唆られた。就中靈洞院藏犬追物圖の如きは少數專門家を別にしては殆ど初めて公に紹介せられたと云ふべきであらう。會期五月十一日より同二十六日に至る、出陳計八十三點。於恩賜京都博物館。（正木）

神護寺名寶展觀　從來屢〻各寺院別の特別展觀を行つて來た恩賜京都博物館は這般五月十九日より同三十一日に至るまで神護寺名寶の特別展觀を行つた。かくの如き寺院別の特別展觀は時に祕庫の埋寶を學界に紹介することがあつて多大の裨補をなして來た。神護寺はその沿革の古く、寺格の高きに比して、中途に幾度か荒廢の悲運を閱してゐるが爲に、その祕寶、資料の如きも略數ふるに足るに過ぎず、從つて今回の展觀によつて新しく學界の注目を牽くに足る發見があつたとは言ひ難い。さるにしても繪畫には兩界曼荼羅を始めとして、重盛、賴朝、文覺等の肖像畫、十二天屏風等の優品あり、資料には種々の古文書